

童話「かぼちゃのつる」原作と道徳教科書各版の比較検証

Comparative Study on 11 Different Editions of “A Squash Vine”

井谷 信彦

ITANI, Nobuhiko

武庫川女子大学 学校教育センター紀要

第8号 2023年

童話「かぼちゃのつる」原作と道德教科書各版の比較検証

Comparative Study on 11 Different Editions of “A Squash Vine”

井谷 信彦*

ITANI, Nobuhiko*

要旨

本稿の課題は、道德教材として広くもちいられている童話「かぼちゃのつる」の原作と道德教科書掲載の各版を比較検証することをとおして、①原作および道德教科書各版のあいだで本文にいかなる相違が見られるのかを明らかにすること、②各異版の改変が登場人物の印象や物語の読解にいかなる影響を及ぼすものであるのかを考察することにある。これにより各版のあいだには、主人公をあらわす主語の相違や、物語の冒頭と末尾にある太陽の描写の相違、主人公や他の生きものたちの言動の相違など、複数の重要な相違が存在することが証示される。加えてこれらの改変は、主人公の言動の背景の不明瞭化や、主人公の死を予感させる結末の回避、「わがまま」という道德的主題の強調、制裁の理不尽さの緩和、登場人物の言動をめぐる省察の端緒の削減・創出など、この童話を道德教材として読み解くさいに無視することのできない重要な影響を及ぼすものであることが明らかにされる。

キーワード：道德教育 かぼちゃのつる 節度・節制 わがまま 多様な価値観

1. 本稿の課題

本稿の課題は、道德教材として広くもちいられている童話「かぼちゃのつる」の原作と道德教科書掲載の各版を比較検証することをとおして、①原作および道德教科書各版のあいだで本文にいかなる相違が見られるのかを明らかにすること、②各異版の改変が登場人物の印象や物語の読解にいかなる影響を及ぼすものであるのかを考察することにある。次節に見るように、「かぼちゃのつる」は半世紀以上にわたって道德教育の教材として読み継がれてきた童話であり、小学校教員からも高い評価を与えられてきた作品である。しかし、道德教科書への掲載にさいしては複数の厳しい批判も寄せられており、原作からの改変による読解への影響や、「わがままをしない」という規範の強要が問題視されている作品でもある。本稿が特に「かぼちゃのつる」を調査対象とする比較検証に取り組むのは以上の理由による。個々の異版に施された変更、削除、加筆などを見定めたうえでその影響を考察することによって、異なる複数の観点からこの教材を読み解き、「多様な価値観の存在を前提」^①とする対話と協働に開かれた道德授業を構想・実践するための、端緒が築かれるものと期待される。

2. 童話「かぼちゃのつる」をめぐる従来の議論

「特別の教科 道德」の教科書は8つの出版社から刊行されているが、童話「かぼちゃのつる」は8社すべての教科書に小学校1年次の教材として掲載されている。この童話の原作は1954年に刊行された雑誌『母の友』第11号所収の大蔵宏之「かぼちゃのつる」を初出とする。また、これに若干の変更を加えたものが佐藤義美（編）『日本イソップ：一年生』（1961年）に集録されている。文部省の発行による『小学校道德の指導資料（第3集）第1学年』（1966年）は、この書籍版の挿絵をすべて変更したうえで道德の授業の指導案を添えて掲載している^②。これ以来、童話「かぼちゃのつる」は

* 教育学科准教授

半世紀以上の長きにわたって道徳教材として活用されてきたのである。

「かぼちやのつる」雑誌版の概要は以下のとおりである。まぶしい朝日をあびたかぼちやのつるは「ぐんぐんぐんぐん」と畑の外まで伸びていく。みつばちやちょうちょうに止められても、すいかに迷惑がられても、こいぬに咎められ踏みつけられても、おかまいなしである。だが、突然やってきた荷車に轢かれて寸断されたかぼちやのつるは、「いたいよオ」と涙をこぼして泣く。以上のような物語全体の大枠は他の諸版にも引き継がれている。

この雑誌版の末尾には「主題」として「自分さえよければ他人はどうだっていいという人間がこの上ふえてはたまりません」との一文が加えられている。書籍版にも「わがままをしてはいけません」という導入文が添えられている。文部省版に「わがままや自分かってな行動を慎もうとする気持ちを育てる」という主題が掲げられているのもこれら 2 件の原作を典拠とするものと推察される⁽³⁾。現在の道徳教科書 8 件中 6 件にも、道徳科の内容項目「節度、節制」の説明にある「わがままをしない」や類似の文言が、この教材の主題として記載されている⁽⁴⁾。また、「わがままをしない」などの言葉が見られない他の 2 件にも「節度、節制」との関連は明示されている。なるほど、周囲の制止を聞かずに伸び続けたかぼちやのつるが荷車に轢かれてしまうという結末は「わがままをしてはならない」という教訓を伝えているのだという見方には、一定の説得力が認められる。

東京学芸大学の調査（2012 年）によれば、小学校教員が「効果的である」と認めた道徳資料・教材のなかで、「かぼちやのつる」は低学年向けの教材の第 2 位に挙げられている⁽⁵⁾。約半世紀前に刊行された短編童話が、数多くある道徳教材のなかで、現職の教員から特に高い支持をえているのである。現在全 8 社の道徳教科書にこの童話が掲載されている事実にも照らしてみても、「かぼちやのつる」の教材としての意義は年月を超えて高く評価されてきたことが窺える。

だがこの童話「かぼちやのつる」の道徳教科書への掲載には厳しい批判も寄せられている。例えば元小学校教諭の西光美奈子は、集団にあわせることを過度に求められることで、クラスになじめない児童が疎外感を味わったり、自己主張ができなくなったりするのではないかと懸念から、かぼちやの行為を「わがまま」と決めつける教科書の構成に疑問を投げかけている⁽⁶⁾。また、教科書展示会の参加者の多くが「かぼちやのつる」の結末への違和感を口にしていたという樋浦敬子の報告もある。報告のなかで紹介されているのは、「わがまま」な行動をとったかぼちやがトラック（原作では荷車）に轢かれるという結末には「わがままをしたら罰を受けるのは当然」や「痛い思いをしたくなければわがままをするな」というメッセージが含まれており、これは恐怖によって児童の行動を縛りつける「暴力容認の話」だという意見である⁽⁷⁾。また国語科教育を専門とする須貝千里も、道徳教科書版の「かぼちやのつる」においては「わがまま」を戒める徳目が絶対視され、主人公の「成長への願い」が見落とされているとして苦言を呈している⁽⁸⁾。日本学術会議の哲学・倫理・宗教教育分科会でも、主人公が成長を願うことを咎めたと「他者や社会のための自己犠牲を求める」かのような教材の事例として、「手品師」や「星野くんの二塁打」と並んで「かぼちやのつる」が問題視されている⁽⁹⁾。

これに加えて樋浦の報告には、「かぼちやのつる」が第二次世界大戦の終戦の日を描いた作品なのではないかという意見や、かぼちやが「忠告を無視して戦線を拡張した戦前の日本」のことではないかという意見も紹介されている⁽¹⁰⁾。この童話は子どもの「わがまま」を戒める作品だという解釈は作意を捉え損ねているのではないかというのである。樋浦らが特に注目しているのは、学研版などの冒頭や末尾に見られる「ぎんぎらぎんぎら」という太陽の描写や、書籍版の挿絵に描かれた八の字の口髭、雑誌版の刊行が終戦記念日を翌月に控えた 7 月であること、表紙には原爆ドームの写真が掲載されており掲載記事にも戦争と平和に関する文章が複数見られること、1954 年は水爆実験による被爆事件

や自衛隊創設の年であること、人々の生活を見つめながら平和を訴えた大蔵宏之の作品『戦争っ子』などである。島村輝もまた雑誌版が刊行された年の社会状況に目を向けながら、かぼちゃは軍国主義日本の象徴であり、荷車は連合国の象徴であるとの解釈を提示している。樋浦による上述の着眼点に加えて島村が特に注目しているのは、『日本イソップ』の編者の佐藤義美に反戦・反核を訴える作品が多いこと、横暴な行いをしたもの（日本）がより激しい暴力（原子爆弾）によって制裁されるという太平洋戦争の顛末、プロレタリア歌人／詩人としての大蔵宏之の作風などである。こうした点を論拠として島村は、「かぼちゃのつる」を道徳教材として読むことは「作品に関わる文脈の改変」であり、これが小学校1年次のすべての教室で扱われることは「不適切」とであると結論している⁽¹¹⁾。

本稿の課題にとって特に重要なのは、雑誌版の冒頭と末尾に見られる「ギンギラギンギラ」という太陽の描写を忠実に再現している道徳教科書は学研版のみである、という島村の指摘である。雑誌版の冒頭は「あめ色のお日さまが、ギンギラギンギラまばゆい朝です」と始まっており、同じく末尾は「お日さまは、あいかわずギンギラギンギラてりつけているだけでした」と結ばれている。島村の指摘にあるとおり、学研版以外の教科書ではこれが両方または片方削除されていたり、「ギンギラ」というオノマトペが省略されていたりする。島村によれば、童話の冒頭と末尾に置かれたまぶしい太陽の描写は作品の「粹」であり、暴力による制裁の「理不尽さを浮き彫りにする役割を果たしている」という。この「理不尽さ」を児童に突きつける覚悟を抜きにして、単に「わがままをしてはならない」と教えるための教材として「かぼちゃのつる」を使用することは、この作品の読解として「誤って」いるばかりでなく作者への「冒涇」でもあると彼は説く⁽¹²⁾。童話「かぼちゃのつる」の原作と教科書各版の違いおよびその含意を明らかにした島村の論考は、原作と各異版のあいだの差異が重要な意味をもちうることを示唆するものであり、本稿の課題の貴重な先駆にあたるといえる。

しかし、「かぼちゃのつる」をもちいた道徳の授業案が掲載された書籍や雑誌記事は複数見られるにもかかわらず、管見によるかぎり、「かぼちゃのつる」の原作および道徳教科書掲載の各版のあいだの差異を詳細に比較検証している論稿は見当たらない。以下の各節の議論によって明らかにされるように、この童話の雑誌版と、書籍版、文部省版、教科書版のあいだの相違・改変には、本文の読解に浅からぬ影響を与えるものが複数含まれている。「かぼちゃのつる」原作の雑誌版と書籍版のあいだで、また原作と文部省版のあいだで、さらに各出版社の道徳教科書版とのあいだで、いかなる変更、削除、加筆がおこなわれてきたのか、各異版に見られる改変は登場人物の印象や物語の含意にいかなる影響を与えるものであるのか。節を改めて詳しく検証していきたい。

3. 調査：「かぼちゃのつる」各版の比較検証

3-1. 調査対象と調査項目

調査対象は、大蔵宏之原作の「かぼちゃのつる」雑誌版と、書籍版、文部省版、および現在の教科書教材として、あか図版、学研版、学図版、教出版、光文版、東書版、日文版、光村版、合計10件の異版である。8件の教科書版には2016年度に検定を受けた旧版と、2018年度に検定を受けた新版が存在している。旧版と新版のあいだでは、本文の前後に記載された主題や設問が変更されている場合が多いが、本文が大きく変更されている例は稀である。このため本稿は原則として2018年度検定の新版を調査対象としてもちい、旧版からの変更が問題となる場合にのみ相違に言及することにする。なお、教科書版8件のうち半数の4件では、登場人物の台詞がふきだしのなかに書かれており、地の文が大幅に省略された漫画のような構成となっている。これ以外の原作と異版にも各々異なる挿絵が添えられている。本稿の主題は「かぼちゃのつる」の本文であるが、挿絵・漫画の相違が本文の読解

と密接に関わっていると思われる箇所については、各版の挿絵・漫画も比較検証の対象とする。この点もふまえたうえで比較検証の調査項目には、原作および各異版のあいだで特に顕著な相違・改変が見られ、本文の読解に重要な影響を及ぼすと予想される点として、(1) 主人公をあらわす主語、(2) 主人公をあらわす挿絵・漫画、(3) 太陽に関する描写、(4) 他の生きものに関わる主人公の言動、(5) 主人公に関わる他の生きものの言動の、計 5 項目を取りあげる。このほかにも、句読点の位置や、漢字・平仮名・片仮名、わかちがきの位置など、版ごとにいくつかの細かな相違点が見られるが、これらの点に関しては上記の調査項目に関連するかぎりでは補足していくことにしたい。

3-2. 調査結果 (1) 主人公をあらわす主語

「かぼちゃのつる」の原作と道徳教科書各版を読み比べて最初に目を引かれるのは、おもな行為の主体（主人公）をあらわす主語が版によって異なっていることである。この相違を明らかにするために本調査はこの童話を 3 つの場面にわけて比較検証をおこなった。①物語の冒頭でかぼちゃのつるが畑の外へと伸びていく場面、②物語中盤で他の生きものたちとの交流が見られる場面、③物語の終盤でかぼちゃのつるが荷車（トラック・車）に轢かれてしまう場面の 3 つである。これら 3 つの場面について、つるが畑の外へと伸びていくときの主語は何か、他の生きものたちと会話をしているときの主語は何か、荷車（トラック・車）に轢かれて泣いているときの主語は何かを調べた（表 1）。

表 1 「かぼちゃのつる」各版・各場面の主人公をあらわす主語

	場面①：冒頭	場面②：中盤	場面③：終盤
雑誌版	かぼちゃのつる	かぼちゃのつる	かぼちゃのつる
書籍版	かぼちゃのつる	かぼちゃのつる	かぼちゃのつる
文部省版	かぼちゃのつる	かぼちゃのつる	かぼちゃのつる
あか図版	かぼちゃのつる	かぼちゃのつる	かぼちゃのつる
学研版	かぼちゃのつる	記載無※	記載無※
学図版	かぼちゃ	かぼちゃ	かぼちゃ
教出版	かぼちゃ	かぼちゃ	かぼちゃ
光文版	かぼちゃのつる	かぼちゃのつる	記載無※
東書版	かぼちゃのつる	記載無※	記載無※
日文版	かぼちゃのつる	かぼちゃ かぼちゃのつる	かぼちゃ
光村版	かぼちゃのつる	かぼちゃ かぼちゃのつる	かぼちゃ

※漫画形式のため主語をふくむ地の文が省略されている。

「かぼちゃのつる」雑誌版、書籍版、文部省版では、上記①②③の 3 つの場面いずれをとっても、行為の主体はかぼちゃのつるである。例えば、雑誌版の場面①は「かぼちゃばたけのかぼちゃのつるは、ぐんぐんぐんぐんのびていました」と描写されており、続いて「いっぽんのかぼちゃのつる」「ぼく、こっちへのびよう」といって「はたけのそとへのびて」いく。また場面②も、みつばちの忠告にたいする反論が「かぼちゃのつるは、そういつてききません」と描写されているように、常に「かぼちゃのつる」を主語として書かれている。終盤の場面③も、「かぼちゃのつるは、ぼろぼろぼろぼろなみだをこぼして、なきました」と、やはり「かぼちゃのつる」を主語として描写されている。この点に関しては書籍版や文部省版も変更がない。現行の道徳の教科書のなかでは唯一あか図版だけが、場面①②③とも原作どおり「かぼちゃのつる」を主語としている。

これと最も明確な対照をなしているのが、場面①②③いずれも「かぼちゃ」を主語としている学図

版である。例えば、物語冒頭の場面①は「かぼちゃばたけのかぼちゃは、ぐんぐんぐんぐん、つるをはたけのそとにのぼしていきました」と、かぼちゃを主語にして描写されている。場面②のみつばちへの反論も「かぼちゃはそういつてききません」と描かれており、他の生きものとの会話の主体は常に「かぼちゃのつる」ではなく「かぼちゃ」とされている。場面③も「かぼちゃは、ぼろぼろなみだをこぼしました」と描かれており、かぼちゃを行為の主体とする描写が一貫している。

原作と学図版の折衷案とでもいえそうなのが日文版と光村版である。これらの2つの異版は、場面①を「かぼちゃのつる」を主語として、場面③を「かぼちゃ」を主語として書いている。また場面②のなかでは2つの主語が使われている。他の生きものとの会話で「かぼちゃ」を主語として書かれているのにならして、かぼちゃのつるがすいか畑に伸びていく箇所（光村版）や、すいかのつるの上を伸びていく箇所（日文版・光村版）では、「かぼちゃのつる」が主語とされている。光村版から例を引けば、「かぼちゃは、そういつて、ききません」（みつばちとの会話）や、「かぼちゃのつるは、ぐんぐんすいかのつるのうえを、のびていきました」などの描写が見られる。なお、日文版の2018年度検定の新版で「かぼちゃ」を主語としている箇所のうち2箇所（場面②の会話）は、2016年度検定の旧版で「かぼちゃのつる」を主語としていたのが変更された箇所である⁽¹³⁾。

漫画形式をとった学研版、教出版、光文版、東書版においては、主語をふくむ地の文が大幅に省略されている。学研版、光文版、東書版は、場面①の主語を「かぼちゃのつる」としている。教出版はこれを学図版とおなじく「かぼちゃ」としている。場面②に主語が示されているのは教出版と光文版のみである。教出版は、こいぬに踏まれた主人公の態度を「かぼちゃは、つるをこいぬにふまれても、へいきなかおをしています」と、「かぼちゃ」を主語にして描写している。他方の光文版は、かぼちゃのつるがすいか畑へと伸びていくようすを、「かぼちゃのつるは、みちをこえてすいかばたけにのびていきました」と、「かぼちゃのつる」を主語にして描写している。場面③の主語が明示されているのは教出版のみであり、泣いている主体は「かぼちゃ」として描写されている。とはいえもちろん、漫画という表現形式の特性上これだけで各版の主人公が特定されたと断言することはできない。

3-3. 調査結果（2）主人公をあらわす挿絵・漫画

このため次に本調査は、主人公をあらわす主語に関する調査を補うべく、主人公をあらわす挿絵・漫画の特徴について、原作と各異版の比較検証をおこなった。各版の挿絵・漫画について、いくつの場面に挿絵・漫画が掲載されているか、擬人化された主人公の顔はどこに描かれているか、漫画形式の主人公の台詞のふきだしはどこを起点としているかを調べた（表2）。

本文中の主人公をあらわす主語を「かぼちゃ」に統一していた学図版と教出版はいうまでもなく、主語の多くが省略されていた学研版、光文版、東書版でも、擬人化された主人公の顔はかぼちゃの実に描かれている。また、主人公をあらわす主語が「かぼちゃのつる」に統一されている雑誌版、書籍版、あか図版でも、「かぼちゃ」と「かぼちゃのつる」の2つの主語が混在していた日文版と光村版でも、主人公の顔は場面に関わらずかぼちゃの実に描かれている。漫画形式をとった学研版、教出版、光文版、東書版では、主人公の台詞が書かれたふきだしは、常にかぼちゃの実を起点として描かれている。主人公の主語を「かぼちゃ」に統一している教出版だけでなく、場面①の「伸びていく」主体を「かぼちゃのつる」と書いている学研版や東書版も、場面①②で「かぼちゃのつる」を主語としている光文版も、主人公の発話の起点はかぼちゃの実になっているのである。なお、唯一文部省版だけは他と異なり挿絵のなかに主人公の顔を描いていない。

表2 「かぼちゃのつる」各版の主人公をあらわす挿絵・漫画

	描かれている場面数	主人公の顔	ふきだしの起点
雑誌版	1	かぼちゃの実	掲載無
書籍版	5	かぼちゃの実	掲載無
文部省版	5	掲載無	掲載無
あか図版	4 [*]	かぼちゃの実	掲載無
学研版	5	かぼちゃの実	かぼちゃの実
学図版	4	かぼちゃの実	掲載無
教出版	6	かぼちゃの実	かぼちゃの実
光文版	3	かぼちゃの実	かぼちゃの実
東書版	6	かぼちゃの実	かぼちゃの実
日文版	4	かぼちゃの実	掲載無
光村版	3	かぼちゃの実	掲載無

※ページの上下を別々の挿絵と捉えれば6場面

道徳教科書版の全8件において、かぼちゃの実の挿絵・漫画は明確な表情をもって描かれており、両目、口、まゆ、輪郭などの変化によって場面ごとに種々の感情が表現されている。雑誌版の挿絵はかぼちゃ（実とつる）とすいかとこいぬの三者を描いた1点だけであるが、目鼻を描かれたかぼちゃの実とすいかの実にはやはり明確な表情を読みとることができる。ただ、いずれの場合もかぼちゃの年齢を絵柄から判断することはできない。書籍版の最初のページに描かれたかぼちゃの実の挿絵は、吊りあがっているようにも見える小さな両目とまゆに、ごつごつとした鼻、八の字の口髭、への字の口元が描かれており、他の版と比べて大人びた厳めしい表情になっている。

3-4. 調査結果（3）太陽に関する描写

続いて、樋浦敬子や島村輝が注目していた太陽の描写について原作と各異版の異同を確認しよう。童話「かぼちゃのつる」原作の冒頭と末尾には、「ギンギラギンギラ」照りつけている太陽の描写が見られた。原作と各異版における太陽の描写の有無を整理したのが表3である。

表3 「かぼちゃのつる」各版における太陽の描写の有無

	本文（冒頭）	本文（末尾）	挿絵・漫画
雑誌版	○	○	×
書籍版	○	○	×
文部省版	○	○	○
あか図版	○	×	○
学研版	○	○	○
学図版	×	×	×
教出版	×	×	×
光文版	×	×	×
東書版	×	×	×
日文版	×	×	×
光村版	○	×	×

「かぼちゃのつる」雑誌版の冒頭は「あめ色のお日さまが、ギンギラギンギラまばゆい朝です」と始まる。この「まばゆい」を「まぶしい」に替えたうえで、漢字・仮名・句読点など若干の変更を加えたものが、書籍版や、文部省版、あか図版にも引き継がれている。学研版ではここからさらに太陽の特徴である「あめ色の」が省略されている。光村版は「おひさまが、まぶしいあさです」とかなりシンプルな叙述になっている。これら以外の学図版、教出版、光文版、東書版、日文版の5件では、

物語冒頭の太陽に関する記述は完全に削除されている。

雑誌版の末尾は「でも、お日さまは、あいかわらずギンギラギンギラてりつけているだけでした」と結ばれている。書籍版と文部省版は「でも」を省いて「ギンギラギンギラ」を平仮名にしたうえで、「てりつけているだけでした」を「てりつけていました」に改変している。現在の道德の教科書では唯一学研版だけが（「日」を平仮名にしたうえで）書籍版や文部省版と同様の叙述を残している。冒頭に太陽に関する叙述が見られたあか図版や光村版も、学図版、教出版、光文版、東書版、日文版も、末尾の文章には太陽に関する描写は見られない。

挿絵に太陽が描かれているのは文部省版、あか図版、学研版の3件である。文部省版では5枚ある挿絵のうち場面②2枚と場面③1枚の計3枚に太陽が描かれている。あか図版では、かぼちゃが道路へつるを伸ばそうとしている場面と、すいかから苦情をいわれている場面に、太陽が描かれている。後者が場面②の挿絵であることは明らかである。だが前者は、本文を挟んでページの上部にみつばちも描かれているため、これが場面①なのか場面②なのか定かではない。かぼちゃの視線は道路に向けられており、みつばちと会話をしているようすではないため、本調査はこれを場面①と捉えておく。これら3件以外の挿絵・漫画には、たとえ空の描写があっても、太陽は描かれていない。

本文と挿絵・漫画を総合してみると、本文と挿絵・漫画ともに太陽の描写をふくむのは文部省版、あか図版、学研版である。雑誌版、書籍版、光村版は本文にのみ太陽に関する描写が見られる。挿絵・漫画だけに太陽の描写がふくまれる版はない。また学図版、教出版、光文版、東書版、日文版では、本文と挿絵・漫画いずれにも太陽に関する描写が見られない。

3-5. 調査結果（4）他の生きものに関わる主人公の言動

次に、他の生きものにたいする主人公の言動が原作と各異版でどのように異なるのかを見ていく。本調査は場面②のなかで特に各版の相違が顕著な4つの言動について比較検証をおこなった。他の生きものたちから呼びかけられたさいの返事の有無と、「道をふさいでしまうんだ」という台詞の有無、すいか畑のどこを通過して伸びていくか、および、こいぬの忠告に反論するときの表情の4つである。これらの言動について原作と各異版の異同を整理したものが表4である。

雑誌版、書籍版、文部省版では、他の生きものから「かぼちゃさん、かぼちゃさん」のように呼びかけられたさいに、「なんだい、〇〇さん」と答える主人公のようすが描かれている。相手がこいぬの場合のみ呼称が互いに「〇〇くん」とされている。この返答は現在の道德の教科書ではすべての版で削除されている。主人公の「ぼく、道をふさいでしまうんだ」という台詞は、雑誌版、書籍版、文部省版の、みつばちとの会話に見られるものである。みつばちからの「そこは人のおる道ですよ」という忠告にたいして、主人公は「そんなことかまうものか」と突っぱね「道をふさいでしまうんだ」と返すのである。前者の「かまうものか」あるいは「かまうもんか」という台詞は現在の道德教科書のすべての版に残されている。ところが、後者の「道をふさいでしまうんだ」という台詞を見ることができるのは唯一光文版のみである。

雑誌版、書籍版、文部省版は、かぼちゃのつるがすいか畑へと伸びていくようすを、「すいかのつるの上を、へいきなかおでのびていきました」と描写している。現在の道德の教科書のなかでは日文版と光村版がこの描写を引き継いでいるが、いずれも「へいきなかおで」という説明は省略している。代わりに光村版には原作にはなかった「ぐんぐん」という副詞が加えられている。道德教科書の他の異版の本文には、かぼちゃのつるがすいか畑のどこを通過していったのか、明確な記述は見られない。だが挿絵・漫画に目を向けてみると、あか図版と東書版ではすいかの実の上を、学研版ではすいかの

つるの上を、学図版ではすいかの実を押しつけながら、教出版と光文版ではすいかの実に向かって、かぼちゃのつるが伸びているのを確認できる。いずれの版も、「はいらないで」と頼んでいるすいかの言葉に耳を貸さずに、かぼちゃのつるがすいか畑に侵入していく点は変わらない。

表4 「かぼちゃのつる」各版の他の生きものにたいする主人公の言動

	他の生きものからの呼びかけへの返事	「道をふさいでしまう」という台詞	すいか畑のどこを 通って伸びていくか	こいぬの忠告に 反論するときの表情
雑誌版	○	○	すいかのつるの上	いじわるそうに
書籍版	○	○	すいかのつるの上	いじわるそうに
文部省版	○	○	すいかのつるの上	いじわるそうに
あか図版	×	×	すいかの実の上※	いじわるそうに
学研版	×	×	すいかのつるの上※	吊りあがったまゆ※ 歯を閉じて笑う口元※
学図版	×	×	すいかを押しつけて※	いばって
教出版	×	×	すいかに向かって※	吊りあがったまゆ※ 縦長の楕円形の口元※
光文版	×	○	すいかに向かって※	吊りあがったまゆ※ 口角のあがった口元※
東書版	×	×	すいかの実の上※	吊りあがった両目※ 横長の瓢箪型の口元※
日文版	×	×	すいかのつるの上	いじわるそうに
光村版	×	×	すいかのつるの上	吊りあがったまゆ※ への字に曲げた口元※

※本文には描写がないため挿絵・漫画によって判断。

また、こいぬの忠告に反論するさいの主人公の表情に関しては、雑誌版、書籍版、文部省版では、「いじわるそうに」と描写されている。現在の道徳の教科書のなかでは、あか図版と日文版がこれをそのまま踏襲しており、学図版はこれを「いばって」に改変している。教科書の他の版はこの箇所の主人公の表情に言及していないが、挿絵・漫画に目を向けてみると、「いじわる」または「傲慢」とも受け取れるような表情を見てとることができる。いずれの異版においても、「いじわるそうに」という原作の趣旨が、大なり小なり引き継がれているように見受けられる。

3-6. 調査結果（5）主人公に関わる他の生きものの言動

最後に、主人公にたいする他の生きものたちの言動について原作と各異版の異同を明らかにする。本調査が注目したのは、「かぼちゃさん」という呼びかけの有無、かぼちゃ畑の横の「みち」を通るのは誰か、主人公から反論を受けた他の生きものたちの感情や言動の描写、かぼちゃのつるがこいぬに踏まれる描写の有無の4つの点である。これら他の生きものたちの言動に関する描写に顕著な相違の見られる諸点について比較検証をおこなった結果を整理したのが表5である。

「かぼちゃのつる」雑誌版、書籍版、文部省版には、他の生きものたちが主人公に話しかけるさいに、「かぼちゃさん、かぼちゃさん」と二度呼びかける台詞が見られる。こいぬからの呼びかけだけは「かぼちゃくん、かぼちゃくん」になっている。現在の道徳の教科書のなかでこれを踏襲しているのは光村版だけである。学研版と教出版は各々の呼びかけを「かぼちゃさん」の一度に省略している。日文版ではこいぬだけが「かぼちゃくん、かぼちゃくん」と呼びかけており、他の生きものからの呼びかけは削除されている。あか図版、学図版、東書版においては、「かぼちゃさん」と一度呼びかける生きものと、一度も呼びかけずに忠告や苦情をいう生きものが見られる。光文版においてはすべての生きものからの呼びかけが削除されている。

表5 「かぼちゃのつる」各版における他の生きものたちの言動

	主人公への呼びかけ	「道」を通るのは誰か	主人公の反論への反応	かぼちゃのつるを踏み
雑誌版	各2回	人と犬	○(全員)	○
書籍版	各2回	人と犬	○(全員)	○
文部省版	各2回	人と犬	○(全員)	○
あか図版	1回または×	人と犬	○(こいぬ)	×
学研版	各1回	人・みんな	×	×
学図版	1回または×	人・みんな	×	×
教出版	各1回	みんな	○(こいぬ)	○
光文版	×	人と犬	×	×
東書版	1回または×	人・みんな	×	×
日文版	2回または×	人・みんな	×	×
光村版	各2回	みんな	○(こいぬ)	○

雑誌版、書籍版、文部省版のなかで、かぼちゃ畑の横の「みち」を誰が通るのかに言及しているのは、みつばちとこいぬである。書籍版から引けば、みつばちは「そこは人のとおるみちですよ」と告げ、こいぬは「ここはぼくや人のとおるみちだよ」と苦言を呈している。現在の道徳の教科書をみるとあか図版と光文版がこれを踏襲している。これにたいして教出版と光村版はこの道路を「みんながとおるみち」としている。教出版ではこいぬが、光村版ではみつばちとこいぬが、主人公に「ここはみんながとおるみちですよ」のように忠告している。学研版、学図版、東書版、日文版においては、「ひと」の道路であるという説明と「みんな」の道路であるという説明の両方が見られる。これら4件いずれも、みつばちが「ひと」の道であると告げ、こいぬが「みんな」の道であると伝えている。雑誌版、書籍版、文部省版、あか図版、光文版においては、「ぼくや人のとおるみち」というこいぬの台詞から、「人」は人間(ヒト)という種を指していることが推察される。しかし、学研版、学図版、東書版、日文版では、「ひと」が人間(ヒト)という種を指しているのか、主人公以外の他人あるいは「みんな」を指しているのか、本文から断定することはできない。

雑誌版の原作には、主人公からの反論あるいは抵抗にたいする他の生きものたちの感情や言動が、丁寧に描写されている。みつばちは「かなしそうなかおをして」向こうへ飛んでいき、ちょうちょうは「くやしそうなかおをして」すいか畑へ飛んでいき、すいかは「かなしそう」に「らんぼうしないでくださいよ」と頼み、こいぬは「おこって」かぼちゃのつるを踏みつけ、主人公が平然としていて「あきらめて」去ってしまう。書籍版および文部省版においては、みつばちとちょうちょうの感情の描写が省略されているが、他の点については雑誌版の叙述が踏襲されている。現在の道徳教科書版のなかでは、他の生きものたちの感情や反応は、大幅に削除されている。あか図版、教出版、光村版には、主人公の反論を受けたこいぬの感情と言動が記されているが、他の生きものたちに関して本文には何も書かれていない。学研版、学図版、光文版、東書版、日文版を見ると、主人公から反論された他の生きものたちの感情や言動はすべて削除されている。

上述のように、主人公からの反論にたいする他の生きものたちの感情や言動の1つとして、雑誌版、書籍版、文部省版には、こいぬが「おこって」かぼちゃのつるを踏みつけるという描写が見られる。現在の道徳の教科書のうち教出版と光村版はこれを踏襲している。ただいずれの版も、雑誌版、書籍版、文部省版に見られる「なんだと。おとなしくいえばいいきになって、なんてことをいうんだ」というこいぬの台詞は省略している。あか図版には「子犬はあきらめてむこうへ行ってしまいました」という原作の叙述は引き継がれているが、子犬がかぼちゃのつるを踏みつける描写は見あたらない。学研版、学図版、光文版、東書版、日文版においては、こいぬがかぼちゃのつるを踏みつける描写も、あきらめて去ってしまう描写も、いずれも削除されており挿絵・漫画にも見られない。

4. 考察：「かぼちゃのつる」改変の影響

4-1. 考察（1）主人公の改変

童話「かぼちゃのつる」のおもな行為の主体（主人公）をあらわす主語は、雑誌版と書籍版の原作においては「かぼちゃのつる」に統一されているのにながら、道徳教材として刊行された各異版のあいだでは「かぼちゃ」を主語としているものが複数見られた。あか図版や学図版や教出版のように主人公をあらわす主語が一貫している版もあれば、日文版や光村版のように「かぼちゃ」という主語と「かぼちゃのつる」という主語が混在している版も見られた。また、挿絵・漫画に目を向けると、文部省版をのぞいては原作も教科書版もすべての版で、かぼちゃの実に主人公の顔が描かれており、漫画形式をとった4つの版では主人公の台詞のふきだしもかぼちゃの実を起点としていた。日文版には旧版と新版で主語が変更されている箇所も見られた。文部省版と教科書の各版（いずれも旧版）を読み比べた上原秀一は、「かぼちゃの意識は、つるに有るのか、実に有るのか」判然としないと指摘している⁽¹⁴⁾。加えていえば、主語の「かぼちゃ」が「かぼちゃの実」を指しているのか、実も葉もつるもふくめた「かぼちゃの全体」を指しているのか、という点も不明瞭である。

原作の「かぼちゃのつる」という主語が複数の道徳教科書版で「かぼちゃ」に変更されたことは、この童話の与える印象や読解に大小の影響を与えていることが推察される。第一に、雑誌版や書籍版には、かぼちゃのつるが「へいきななお」をする描写や「なみだをこぼして」泣く描写などがあるにもかかわらず、挿絵の主人公の顔はかぼちゃの実に描かれているという不整合が見られた。学図版、教出版、日文版、光村版などに見られる主語の変更は、本文と挿絵のあいだのこの不整合性を、解消または緩和する働きがあると考えられる。文部省版の挿絵に主人公の顔が描かれていないのも、原作に見られる不整合性を解消するためであったかもしれない⁽¹⁵⁾。学研版、光文版、東書版は、漫画形式によって「へいきななお」や「なみだをこぼして」の主体がかぼちゃの実であることを示しているが、主人公の主語を「かぼちゃのつる」としている点で原作の不整合を引き継いでいる。とはいえ、漫画のなかでは常にかぼちゃの実が喋ったり、他の生きものから話しかけられたり、表情を変えたりしているので、実のほうが行為の主体であるという印象を与える構図となっている。

この主人公をあらわす主語の変更にはもうひとつ非常に重要な影響が認められる。かぼちゃのつるは物語終盤に荷車（トラック・車）の車輪に轢き裂かれてしまう。このとき轢かれて泣いている主体がかぼちゃのつるである場合、裂かれたつるはやがて干乾びてしまうほかないのだから、この場面は主人公の死を予感させる厳酷な結末となる。これにながら、泣いている主体がかぼちゃの実である場合には、伸ばしたつるが失われたことは痛手に違いないが、主人公は健在であり生長を続けることができる。読者が自分を重ねて読んできた主人公が轢き裂かれて死んでしまうという結末と、怪我を負って泣きながらも生き続けるという結末とでは、読者によって体験される出来事の強度が大きく変わってくる。雑誌版や書籍版の原作はこの場面の主語を「かぼちゃのつる」としており、挿絵もないか（雑誌版）あってもかぼちゃの実が描かれていない（書籍版）ため、主人公が荷車に轢き裂かれるという強い衝撃を与える結末となっている。現在の道徳教科書の主人公の主語、挿絵、漫画に目を向けてみると、この最後の場面においては、あか図版以外のすべての版で、かぼちゃの実が泣いている主体であることが明示されている。あか図版だけは本文の主語を「かぼちゃのつる」としているが、挿絵にはかぼちゃの実が泣いているようすが描かれている。これらの改変によって現在の道徳教科書各版は、かぼちゃのつるがトラックや車によって轢き裂かれるという場面を描きながらも、主人公が死んでしまうという最悪の結末を回避あるいは緩和しているのである。

4-2. 考察（２）太陽の描写の改変

「かぼちゃのつる」原作の冒頭と末尾には「ギンギラ」照りつける太陽の描写が見られた。島村輝はこの太陽の描写を暴力による制裁の「理不尽さ」を浮き彫りにする「枠」として捉えていた。この童話を太平洋戦争の比喩とする解釈の是非に関しては判断を保留するとしても、「わがまま」を貫いたかぼちゃのつるが荷車に轢き裂かれるという結末が、罪と罰の不均衡を感じさせるものであることは確かである。だが、なぜ童話の最初と最後に置かれた太陽の描写が暴力による制裁の「理不尽さ」を浮かびあがらせる働きをもちうるのか、あるいは、太陽の描写と「理不尽さ」とのあいだにいかなる関連が認められるのかという点に関しては説明されていない。このため、現在の道德教科書の多くの版において太陽の描写が削除されたことによる影響も十全に考察されているとはいいがたい。

太陽の描写と「理不尽さ」の関連を明らかにするためには、この太陽がかぼちゃのつるの生と死に深く関与している存在であるという事実を、丁寧に省みることから始めなければならない。須貝千里は、「かぼちゃのつる」原作冒頭の太陽の描写を生命の誕生の「場」として捉え、この描写に主人公の「成長への願い」を読みとっている⁽¹⁶⁾。太陽から届けられる光と熱のエネルギーは地球上のあらゆる生命活動の源である。「ギンギラ」とまぶしく輝く太陽に照らされて「のびたい」と願い、「ぐんぐん」伸びてゆくことは、かぼちゃのつるにとって極めて自然な営みであるといえる。なるほど、自分の畑の境界を越えて道路や他の畑にまで伸びていったことは、かぼちゃのつるの「わがまま」であったといえるかもしれない。だが、仮に太陽が「ギンギラ」と強く照りつけている朝でなければ、かぼちゃのつるも「ぐんぐん」と伸びてゆくことはなかったはずである。ところが、朝日に照らされて奔放に伸び育っていったかぼちゃのつるは、警告も弁解の余地も与えられないまま、突如として荷車の車輪に轢かれて寸断されてしまう。轢き裂かれたかぼちゃのつるは、相変わらず「ギンギラ」と容赦なく照りつける太陽を浴びて、遠からず枯れて朽ちてしまうだろう。あらゆる生命活動の源としての太陽がここでは一転主人公の死を予感させる存在となっている。童話「かぼちゃのつる」の最初と最後で対をなしている太陽の描写は、かぼちゃのつるが「のびたい」と願い伸びずにはいられなかった背景と、荷車に轢き裂かれたすえに干乾びて死んでしまう運命を読者に告げ知らせている。このように読み解いてみるとたしかに、かぼちゃのつるという一個の生命体が自己の生長を願い、生きて、死んでいくことに関わる不思議さと理不尽さが、太陽の描写によって鮮明な輪郭を与えられているのを見ることができる。尽きることなく拒むことを許さない太陽からの贈与と、朽ちてゆくものにも容赦なく照りつける陽光の厳酷さは、あらゆる道德規範の基底をなしている生と死の象徴である。

だが、「かぼちゃのつる」原作の冒頭と末尾に置かれた太陽の描写は、現在の道德教科書の多くの版において削除、省略、改変されていた。物語冒頭の太陽の描写を削除することは、かぼちゃのつるが「のびたい」と願い伸びずにはいられなかった背景の説明を削除することであり、かぼちゃのつるの「わがまま」あるいは自分勝手な言動を強調することに繋がる。また、物語末尾にあった太陽の描写を削除することは、主人公の死を予感させる厳酷な結末を削除することであり、罪と罰のあいだの不均衡が完全に解消されるわけではないにしても、暴力による制裁の理不尽な印象を低減させることに繋がる。したがって、原作の最初と最後に見られた太陽の描写のいずれかまたは両方を削除することは、かぼちゃのつるが伸びていった背景や死を予感させる結末を削除することで、道德教材としての「わがままをしない」という主題を明確にすることに繋がると考えられる。逆にいえばこのことは、かぼちゃのつるはなぜ畑の外にまで伸びていったのかという問題や、荷車やトラックに轢き裂かれるという結末を自業自得といって済ませてよいのかという問題を、本文にもとづいて問い深めるための端緒が削減されるということでもある。

4-3. 考察（3）登場人物の言動の改変

「かぼちゃのつる」雑誌版、書籍版、文部省版には、他の生きものたちとかぼちゃのつるの交流の最初に、他の生きものからの「かぼちゃさん、かぼちゃさん」という呼びかけと、かぼちゃのつるの「なんだい、〇〇さん」という返答が見られた。だが現在の道徳教科書を見ると、他の生きものからの呼びかけは光村版以外のあらゆる版で削除あるいは一度に省略されており、かぼちゃのつるからの返答はすべての版において削除されていた。「かぼちゃさん」という呼びかけに「なんだい」と答えるやりとりは、「わがままをしない」という単元の主題に照らしてみれば、核心から外れた些末なことに思われるかもしれない。とはいえ、話しかけられるたび律儀に「なんだい」と答えるかぼちゃのつるの台詞には、かぼちゃのつるが他の生きものたちの言葉に耳を傾ける姿勢が現われていると見れば、これに重要な含意を認めることもできるだろう。「なんだい、〇〇さん」という返答が削除された道徳教科書の各版は、主人公が他の生きものたちの忠告に耳を貸そうとしないだけでなく、最初から何を言われても聞く耳をもたないような印象を与える。「かぼちゃさん」という呼びかけと「なんだい」という返答は、これに続く会話が異なれば違う結末もありえたのではないかと想像させる、対話を基盤とした問題解決のための重要な端緒を示している。

主人公からの反論を受けた他の生きものたちの感情や言動の描写についても同様のことがいえる。悲しそうに去っていくみつばちや、悔しそうに飛んでいくちょうちょ、「らんぼうしないでください」と哀願するすいか、怒ってつるを踏みつけるこいぬらの言動は、忠告にまったく耳を貸そうとしないかぼちゃのつるの態度や、対話を諦めたり暴力に訴えたりする他の生きものたちの姿勢を、丁寧に問いなおすための重要な出発点となるだろう。これらの描写が削除された教科書の各版では、主人公の抵抗を受けて他の生きものがいかなる感情を抱きいかなる行動をとったのか、主人公をふくめた登場人物の言動をめぐる省察の出発点は、読者の想像にもとづく理解に委ねられることになる。

原作に見られる「ぼく、道をふさいでしまうんだ」というかぼちゃのつるの台詞や、あえてすいかのつるの上をとおって伸びていくという行動、さらには「またいでとおればいいじゃないか」というときの「いじわるそう」な表情も、かぼちゃのつるの言動を省みるうえで重要な描写である。これらの場面には「わがまま」というよりむしろ「いじわる」なかぼちゃのつるの姿が描写されているようにも思われる。かぼちゃのつるがすいかの上をとおって伸びていく描写や、こいぬに反論するときの「いじわる」または「傲慢」ともとれる表情は、現在も多く道徳教科書で踏襲されていた。これを「わがまま」の延長と捉えることができるか否かは意見のわかれるところだろう。これにたいして、「ぼく、道をふさいでしまうんだ」という台詞は光文版をのぞくすべての教科書で削除されていた。「道をこえていくんだ」や「道いっぱいひろがるんだ」ではなく「道をふさいでしまうんだ」という台詞には、単純に「のびたい」という欲求とは異なる意識が読みとれる。みつばちに向けられたこの台詞の削除には、主人公の言動から「わがまま」以外の要素を取りのぞいて、「わがままをしない」という主題を明確にする働きがあると考えられる⁽¹⁷⁾。

最後に、かぼちゃ畑の横をとおり「みち」は誰のための道路なのかという問題に関して、雑誌版、書籍版、文部省版、あか図版、光文版は、これを人間や犬のための道路であるとしていた。みつばちやこいぬの台詞からは、この「みち」は特定の生きものが通るための道路であり、かぼちゃのつるはこの道路を通ってはいけない、あるいは、邪魔になるから引き返すべきだという含意が読みとれる。また、「人のとおるみち」と繰り返されていることは、後に荷車やトラックなどが通る伏線にもなっている。ただ、この道路をまたぐと荷車やトラックなどに轢かれてしまうという危険性に関しては、他の生きものたちはいっさい言及していない。他方、学研版、学図版、教出版、東書版、日文版、

光村版は、この道路に関する台詞を「みんながとおるみち」のように改変していた。この「みんなが」を字義どおりに「だれもが」という意味に理解してよいとすれば、かぼちゃのつるがこの「みんな」から排除されているのはなぜか、という疑問が生まれる。学研版、学図版、教出版、東書版、日文版のこいぬは、「こまるよ」や「とおりにくいよ」と言って主人公を咎めている。だが、この道路が文字どおり「みんなのみち」であるとすれば、かぼちゃのつるが通ることを頭ごなしに拒絶するこいぬの態度こそ、自分勝手な不寛容であるという見方もできるだろう。かぼちゃ畑の隣の「みち」を特定の誰かではなく「みんなのみち」とする描写は、「なぜかぼちゃのつるだけが？」という疑問を出発点として、主人公や他の生きものたちの言動を問いなおすための端緒ともなりうる。

5. 本稿の結論

以上本稿は、童話「かぼちゃのつる」の原作と道德教科書掲載の各版を比較検証することで、各版に加えられた改変を明らかにしたうえでその影響を考察してきた。これにより、特に 1950 年代から 1960 年代にかけて刊行された本作品の雑誌版、書籍版、文部省版と現在の道德教科書版とのあいだに、また、全 8 社から刊行されている道德教科書の各版のあいだにも、主人公をあらわす主語・挿絵の相違や、物語の冒頭と末尾に見られる太陽の描写の相違、主人公や他の生きものたちの言動の相違など、複数の重要な相違が存在することが証示された。加えてこれらの改変は、おもな行為の主体に関する本文と挿絵・漫画の不整合の是正、主人公の言動の背景の不明瞭化、主人公の死を予感させる結末の回避、「わがまま」という主題の強調、制裁の理不尽さの緩和、登場人物の言動をめぐる省察の端緒の削減・創出など、道德教材としてのこの童話の読解に重要な影響を及ぼすものであることも明らかにされた。以上の論考によって、童話「かぼちゃのつる」の原作および道德教科書掲載の各異版のあいだには、本作品を道德教材として読み解くうえで無視することのできない、複数の重要な相違・改変が見られることを明らかにした点に、本稿に固有の意義があるといえることができる。これら大小の相違やその影響に関する知見は、単に「わがままはよくない」あるいは「かぼちゃの自業自得だ」といって済ませてしまうのではない、「多様な価値観の存在を前提」とする道德授業を構想するための出発点となるだろう。本稿の成果を礎石としていかなる道德授業を構想することができるのか、授業計画の具体像に関しては、「かぼちゃのつる」の各版に記載されている導入文・設問などの比較検証とあわせて、稿を改めて詳しく論じることにはしたい。

註・引用文献

- (1) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説：特別の教科 道德編』, 2017, p. 18.
- (2) あかつき教育図書（編）『しょうがくせいのどうとく 1』あかつき教育図書, 2022, pp. 36-39; 学研教育みらい『新・みんなのどうとく 1』学研教育みらい, 2022, pp. 16-18; 学校図書編修部『しょうがっこうどうとく 1』学校図書, 2022, pp. 32-35; 教育出版編集局『しょうがくどうとく 1』教育出版, 2022, pp. 16-19; 光文書院（編）『しょうがくどうとく：1ねん』光文書院, 2021, pp. 34-37; 東京書籍『新訂あたらしいどうとく 1』東京書籍, 2022, pp. 53-55; 日本文教出版『しょうがくどうとく 1』日本文教出版, 2022, pp. 68-71; 光村図書出版編集部（編）『どうとく 1』光村図書, 2022, pp. 18-23; 大蔵宏之「かぼちゃのつる」, 『母の友』11, 1954, pp. 30-31; 大蔵宏之「かぼちゃのつる」, 佐藤義美編『日本イソップ：1年生』小峰書店, 1961, pp. 39-46; 文部省『小学校道德の指導資料（第3集）第1学年』, 1966, pp. 1-7. 以下、これら各版からの引用にさいしては、順に「あか図版」「学研版」「学図版」「教出版」「光文版」「東書版」「日文版」「光村版」「雑誌版」「書籍版」「文部省版」という略称をもちいる。各版の童話本文からの引用であることが明確な場合は頁番号を省略する。加えて、引用のさい原文に見られる

わかちがきは省略する。なお、童話「かぼちゃのつる」は上記以外の書籍にも複数収録されているが、管見によるかぎり、上記の雑誌版・書籍版と比べて本文に重大な相違は見られない。このため本稿は日文版や学図版などに出典として明示されている上記の書籍版と文部省版を調査対象として取りあつかう。他の書籍や印刷紙芝居に見られる原作からの変更点のうち特に重要なものは註に記載する。

- (3) 雑誌版, p. 31 ; 書籍版, p. 39 ; 文部省版, p. 1.
- (4) 文部科学省, 前掲書, 2017, p. 26. ; あか図版, p. 36 ; 学研版, p. 137 ; 光文版, p. 34 ; 東書版, p. 53 ; 日文版, p. 68 ; 光村版, p. 18.
- (5) 東京学芸大学「総合的道德教育プログラム」推進本部『道德教育に関する小・中学校の教員を対象とした調査：道德の時間への取組を中心として＜結果報告書＞』, 2012, pp. 85-87.
- (6) 成田洋樹・松島佳子「時代の正体〈498〉道德教科化（中）「自由な発想奪う」」, 『カナロコ』, 2017, <https://www.kanaloco.jp/limited/node/59034> (2022年6月28日最終閲覧) .
- (7) 樋浦敬子「「かぼちゃのつる」の謎」, 『子どもと読書』 429, 2018, p. 10.
- (8) 須貝千里「小学校1年生, 〈困った質問〉に向き合い続けて：文学教育を拓く, 今日の「国語科」の課題」, 『法政大学教職課程年報』 18, 2019, pp. 71-72.
- (9) 日本学術会議哲学委員会哲学・倫理・宗教教育委員会『報告：道德科において「考え, 議論する」教育を推進するために』, 2020, pp. 5-6.
- (10) 樋浦, 前掲記事, 2018, pp. 10-12.
- (11) 島村輝「「道德教材」にされた或る戦後児童文学」, 『Language, Information, Text』 28, 2021, pp. 37-46.
- (12) 島村, 前掲論文, 2021, pp. 41-42.
- (13) 日本文教出版『しょうがくどうとく1』日本文教出版, 2018, pp. 54-55.
- (14) 上原秀一「「道德科」授業において＜問題解決＞とは何か」, 『宇都宮大学教育学部研究紀要』 69, 2019, pp. 4-5.
- (15) 大蔵宏之『まほうのこうもりがさ』(1965) (金の星社) 所収の「かぼちゃのつる」はかぼちゃの葉に主人公の顔を描くことで, 道德紙芝居『かぼちゃのつる』(1979) (教育画劇) はつるの先端に主人公の顔と手を加えることで, この不整合を回避している。
- (16) 須貝, 前掲論文, 2019, p. 72.
- (17) 道德紙芝居『かぼちゃのつる』(1979) (教育画劇) は「みちふさいでしまう」を残しているが, 畑の外まで伸びたかぼちゃのつるの台詞として「ここはひろくておもしろい」が加えられており, 原作にない主人公の動機の描写によってやはり「わがまま」という主題が強調されている。